

番組

<舞囃子>

忠度	シテ	金春 康之
熊野	シテ	高橋 忍
	笛	赤井 要佑
	小鼓	荒木 建作
	大鼓	辻 雅之

<狂言>

魚説教	シテ	善竹 彌五郎
	アド	善竹 隆平

<能>

鉄輪	シテ	金春 穂高
	ワキ	広谷 和夫
	間	善竹 隆司
	笛	赤井 啓三
	小鼓	荒木 建作
	大鼓	辻 芳昭
	太鼓	上田 悟

附祝言

忠度 (ただのり)

花の頃、もとは俊成に仕えていた旅の僧(ワキ)が須磨の浦に赴き、「若木の桜」に手向けをする一人の老人(シテ)と出会う。老人からそれが忠度の墓標だと聞き、俊成に縁のある人物であると、僧は回向する。老人はそれをわが身のこととして喜び、自らが忠度であることをほめかして花の陰に消え失せる(中入)。その夜、僧の旅寝の夢に忠度の亡霊(後シテ)が現れ、和歌の道への執心と、一の谷の合戦での最期の様子を語り、弔いを乞うて姿を消す。世阿弥作(『申楽談儀』)。舞囃子では後シテを中心に紋服で舞う。

熊野 (ゆや)

平宗盛(ワキ)は遠江池田の宿の長の熊野(シテ)を召し出して都に留め、寵愛していた。ある日、熊野の国許から侍女の朝顔(ツレ)が来て、老母の重病を伝える。熊野は宗盛に母の手紙を見せて暇を乞うが、宗盛は許さず、東山の花見への同行を言いつける。一行は車に乗り、花やかな都大路を行くが、熊野の心は重い。清水に着くと宗盛に所望されるまま舞を舞うが、おりからの村雨に桜が散るのを見て、母の病状を案ずる歌を詠む。その歌に感じた宗盛は暇を与え、熊野は東をさして下って行く。『平家物語』巻十の挿話による。

舞囃子では中ノ舞を中心に桜の散る中、母の元へと帰る姿を紋服にて舞う。

鉄輪 (かなわ)

自分を捨てて後妻を迎えた夫を怨み、^{きぶね}貴船の明神に^{うしのときまい}丑刻詣りをしている女(シテ)は、社人(アイ)より「顔に丹を塗り赤い衣を着、鉄輪の三つの足に火をともして頭上に戴いて憤怒の心を持たば、鬼になるだろう」という神のお告げを聞き、早くも鬼の姿に変じかけて帰宅する。(中入)。女の夫(ワキツレ)は、^{おんみょうじ}陰陽師 安倍の晴明(ワキ)の占いにより、女の怨みのために命が危ういと知って、祈禱してもらう。そこへ、鬼となった妻(後シテ)が現れ、恨みを述べて後妻の命を奪い、夫を連れ帰ろうとするが、^{さんじゅうばんじん}三十番神に追い立てられ、力及ばず退散する。

後シテの頭にいただく三つの足に火をともして現れる姿が印象的で、この能独特の面をつけ強い型が連続する見応えのある作品。